

平成26年度 各種調査結果等を活用した学力向上の取組事例

事務所名	県南	学校名	一関市立室根東小学校	TEL	0191-64-2103
------	----	-----	------------	-----	--------------

各種調査結果から明らかになった課題克服のための具体的取組

【ねらい】

- 各種調査(児童質問紙調査も含む)の結果を分析し、課題を洗い出すとともに、課題を克服し学力の向上を目指すために、次の4つの取組を学校全体で進めていく。(今年度掲げた目標は、P5【成果】1(2)今年度掲げた目標の検証を参照のこと)

- ①分析結果・課題と対策・統一された学習訓練と家庭学習の取組についての共通理解 ②課題克服のための授業改善
- ③練習問題の年間を通じた取組と補充指導・個別指導 ④家庭学習と家庭読書の習慣化(家庭との連携)

【具体的な取組】

1 各種調査結果の分析と共通理解(県学調・全国学調・CRT)

(1) 各種調査結果の分析

- ①教科毎の自校、県または全国との正答率・無答率の比較
- ②平均正答率が県または全国平均より低い問題、正答率が50%以下の問題、県または全国平均を上回っているが正答率を上げたい問題の洗い出し(正答率・無答率のチェックも含む)
- ③洗い出した問題の誤答傾向とその対策 ④得点の分布状況(ヒストグラム)から見える課題
- ⑤県学調の経年比較問題と活用問題の正答率の算出と県及び自校の前年度平均との比較から見える課題
- ⑥児童質問紙調査結果の県平均との比較及び各教科正答率との相関関係から見える課題と対策

(2) 分析結果の共通理解

①2月中旬校内研究会「各種調査結果の分析と今後の取組についての共通理解」

- 各種調査結果を分析し冊子にまとめたものを資料にして、自校の課題と今後の対策について話し合う。
(その際に小問毎に何年生で学習する内容なのかを明らかにし、全ての学年での指導が大切であることを確認)
- 1の(1)②で洗い出した問題を全員で解き、授業改善への足がかりとする。

②4月中旬校内研究会「自校の課題と今後の対策についての再確認」「学習訓練と家庭学習の取り組み方についての共通理解」

- 1の(1)②で洗い出した問題を「教科書のどこで、どのように指導するのか、指導のポイントは何か」、指導書をもとに各担任が調べ、教科書に付箋を貼りメモをする作業を同じ場所で一齐に行う。
- 校内で統一した学習訓練「学習に向かう姿勢」の徹底を図るために年度当初に再確認をする。
※「聞くこと」の徹底→「聞くことは分かるための第一歩」※「当たり前なこと」ができる〈例〉チャイム席、学習用具を忘れない、定規で丁寧に線を引く等 ※学習する側の条件を整えることも学力向上のためには大切であり、統一された授業スタイルやノート指導を目指す。
- 前年度、学年毎にどのような家庭学習の取組方をさせたのか、家庭学習ノートの写しや音読カードを持ち寄り、実践内容を報告し、充実した家庭学習となるよう新年度の方向性を話し合う。(本校の「家庭学習の手引き」も参考にする。)

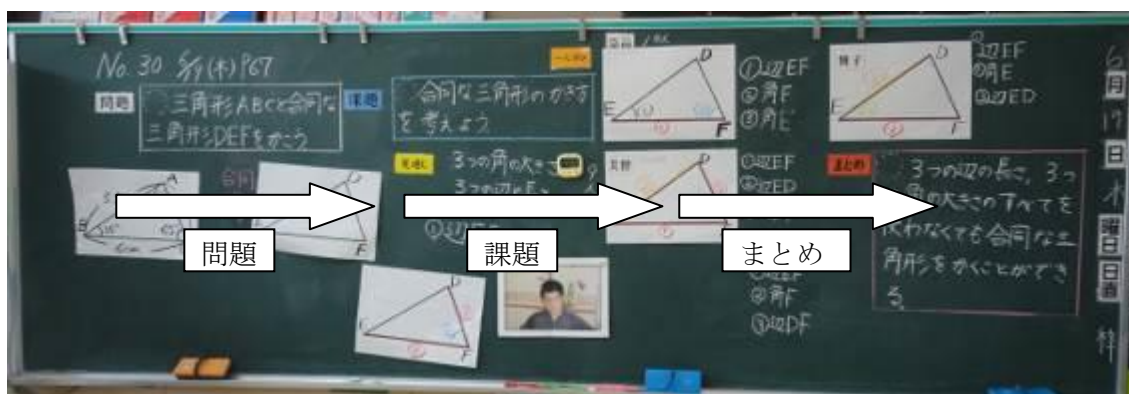
③夏季休業中の校内研究会「平成26年度全国学力・学習状況調査問題に職員全員がチャレンジ」

- 指導する側が問題を解いてみることによって、問題を解くスピード、躓く原因、正答率の低い問題に対する対策等が明らかになり、授業改善に役立てることができる。また、「今、求められている学力」について学ぶ機会にもなる。

2 授業改善への取組(第5学年の実践例)

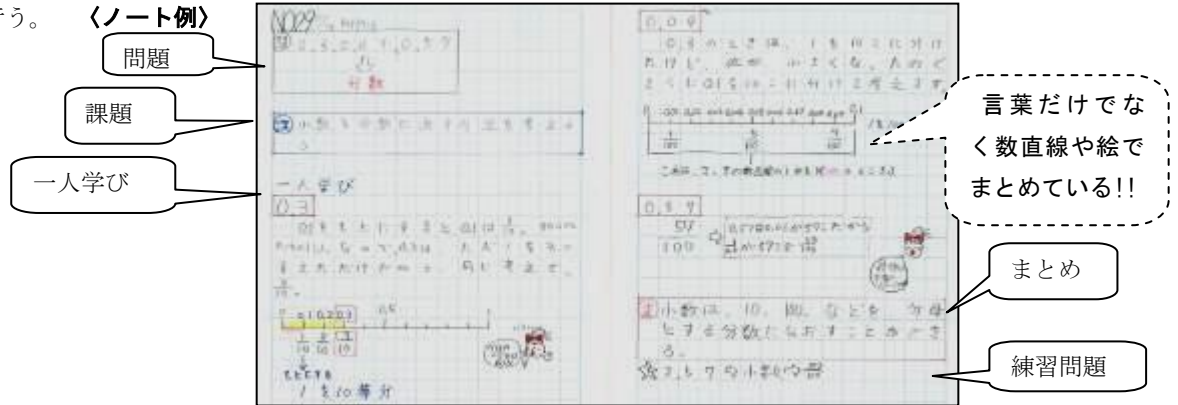
◇どの子ども「学校が楽しい」「勉強が楽しい」と感じられる学級づくりを大切にしながら授業改善に取り組んだ。

(1) 明確な課題提示と課題に応じた学習のまとめを確実に



- 算数の授業では、常に「問題」「課題」「まとめ」を意識して、板書を見れば授業の流れが分かるような板書を心がけた。そうすることで、児童も授業の流れが分かり、安心して、授業に参加することができる。また、継続して取り組むことで、効果が大きくなる。「問題」→（これまでの学習との違い・困り感）→「課題」→「見直し」→（既習内容を活用できないか）→「一人学び」→（自分の考えを言葉だけではなく、図や数直線、絵などでかく）→「学び合い」→（全体、ペア、グループ、ホワイトボード、ＩＣ機器の活用等、様々な形態を取り入れる）→「まとめ」（課題に対応したまとめになるようにする）→練習問題（単位時間毎の定着度と踏きの把握）

- ノートは見開き２ページにまとめるようにし、板書との関連を大切にしたい。ノートはこまめにチェックし、モデルとなるノートの掲示も行おう。



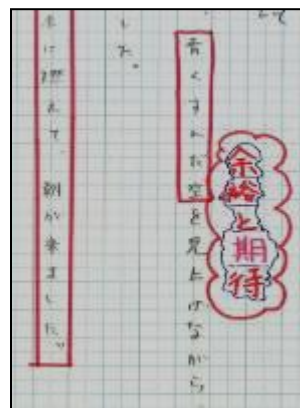
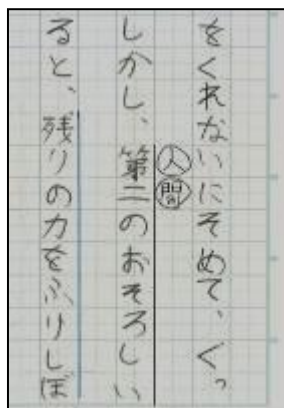
(2) 洗い出した問題の誤答傾向から見てきた弱点の克服(付箋を貼った部分を日常の授業で確実に実践)

《国語》

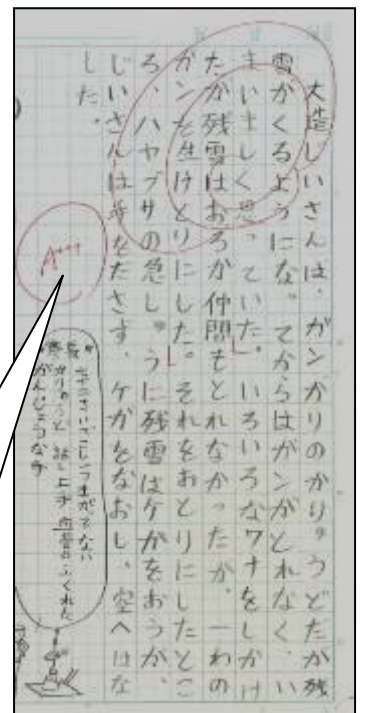
- 問題数が多く、特に「読解問題」が多い。
- 市販のワークテストよりも短時間で多くの問題(文学的な文章や説明的な文章)を解かなければならない。
 - 文学的な文章や説明的な文章の学習では、単元の始めに、初めて出会う教材文ではあるが、「限られた時間の中で登場人物の相互関係や心情、場面についての描写、簡単な要旨等をとらえさせる学習」を取り入れるようにした。これは、初めて出会う文章でも、短時間で目的に応じ、内容や要旨をとらえる力を育てる方法の一つとして行った。
- 字数を制限して抜き出したり、自分の考えを書いたりするのが苦手な児童が多い。
 - 「8文字で」「10文字以内で」というように、字数を制限して発問するよう心がけた。児童は問われていることを探そうと必死に文章を読むようになった。字数制限をすることで、言葉を言い換えたり、うまくつなげたり、分けたりする訓練にもなった。

〈例〉 T:「第2のおそろしい敵」とは、誰ですか。漢字2文字で書きましょう。
 S:人間です。
 T:「青くすんだ空」から、大造じいさんのどのような心情が分かりますか。8文字以内で書きましょう。
 S:「余裕と期待」です。
 T:大造じいさんとガンのあらすじを、三文で書きましょう。

《児童のノートより》



あらすじを考えさせることにより、内容を短時間で読み取ることができるようになる。また、文を限定することにより、言葉を厳選して書こうとする姿が見られる。



《算数》

- 指導する側が実際に各種調査の問題を解いてみると、市販のワークテストやドリル等とは出題の仕方が異なる部分があることがわかる。そこで、これまでの指導を振り返り、指導の重点を探った。

〈例1〉小数のかけ算の問題「 1.25×2.1 」は、テストやドリルでは筆算をすれば普通に解ける問題

「県学調」では筆算ではなく、「 $1.25 \times 2.1 = 125 \times 21 \div 1000$ 」のように、かけられる数を100倍、かける数を10倍したから、わる1000にすればよいという問題が出されている。児童の正答率も低い。

➡ このことから、小数のかけ算の筆算につながる前の段階をこれまで以上に丁寧に指導する必要性が見えた。

〈例2〉東京書籍『新しい算数5上』P.48に「 $7.56 \div 6.3$ 」の計算の仕方を考えさせる場面

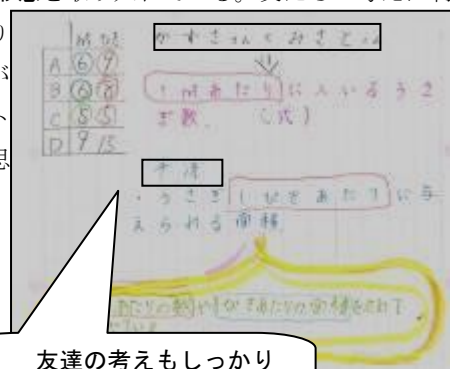
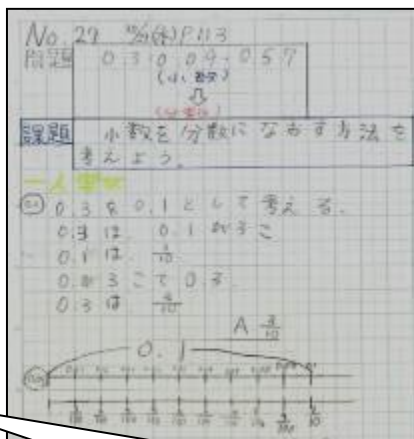
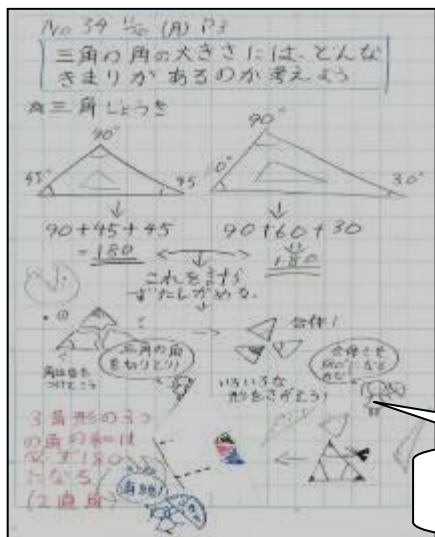
教科書では「 $7.56 \div 6.3$ の商は、 7.56 と 6.3 の両方を10倍した $75.6 \div 63$ の商と等しくなっています。

$7.56 \div 6.3 = 75.6 \div 63 = 1.2$ 答え 1.2」と書いてあり、「小数÷小数」の計算を既習の「小数÷整数」にして考えればよいことが書かれている。そして、そこから小数÷小数の筆算の学習につながっている。しかし、CRTでは「 $2.1 \div 0.42 = 210 \div 42$ 」のような出題の仕方をしている。児童は「 $2.1 \div 0.42$ 」のような問題は筆算で解くことができるが、上記のような形で出題されると躓くことが多い。そこで、筆算の学習に入る前に、「 $7.56 \div 6.3 = 75.6 \div 63$ 」(10倍)、「 $6.3 \div 7.56 = 630 \div 756$ 」(100倍)、「 $6.3 \div 7.562 = 6300 \div 7562$ 」(1000倍)までの練習問題に取り組みさせた。

➡ 指導内容の最も重要なポイントは何か、基本をマスターした後、どこまで活用させる問題を取り入れていくかなどを意識して授業に臨むように心がけた。難しい問題にも積極的にチャレンジさせるようにした。

(3) 「自力解決ができ、解決した手段をわかりやすくまとめる活動」「根拠を明確にしなが発表し、それをもとに学び合う活動」の日常的な積み重ね

・算数の自力解決の場面(本校では「一人学び」と呼んでいる)では、「説明のまつたくん(まず、つぎに、だから)」を意識して、自分の考えをまとめるようにしている。また、その際に、言葉だけではなく、より一層の理解を図るために数直線や図、絵などをかくように指導している。発表場面でも子どもたちは「説明のまつたくん」を意識しながら、「まず、〇〇は◇◇だから(根拠の部分)、□□になります(□□と考えます など)。つぎに、〜〜。だから、〜〜。」というように説明している。時には、A子の考えをB男が説明する、リレー説明をするという方法も取り入れながら、説明する力をつける取組をしている。学び合いでは、全体、ペア、グループ、ホワイトボード、ICT機器の活用等、様々な形態を取り入れている。友だちの考えに刺激されて自分の間違いに気付いたり、友だちの間違いを通して自分の考えを深めたりしながら、学び合う活動を積み重ねてきている。そのため、自力解決の時間に考えがまとまらなかったとしても、学び合いで紹介した友だちの考えを、しっかりとノートに書くことができるようになってきている。このような活動を毎日続けることが「思考力・判断力・表現力」を育てることに繋がってきている。



友達の考えもしっかりノートに書く。

自分の考えを言葉だけでなく、絵や数直線で表すようにする。



ICT機器を活用した学び合いの発表場面

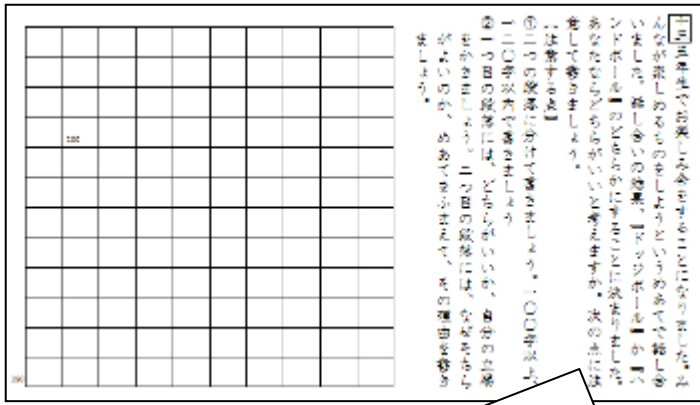
3 練習問題の年間を通じた取組と補充指導・個別指導

(1) チャレンジテストの実施(年4回…6・9・11・2月)

- ・基礎基本の定着が図られているかを確認し、指導の必要な内容についての補充指導を行うために実施(国語と算数)
- ・内容…実施時期までに学習した内容と各種調査で課題の見られた問題の類似問題等を出題

〈5年生の例〉市販のワークテストよりも量を多めに、レベルもやや高くしている。国語では、字数や段落を指定して書く問題を計画的に出題していく。練習用と本番用では数字や記号を変えて出題。解答も作成して問題と一緒に配布し、家庭学習や朝活動で取り組む。定着が不十分な学習については前学年の内容も出題する。

- ・実施期間中に満点を取るまで何度でもチャレンジ(できないこと、わからないことをそのままにしておかない→最後までやり抜く体験をさせる)→満点を取るまでの得点を全て記録した「結果お知らせカード」を保護者に渡す→検印後担任へ返却



2 次の口にあてはまることを書きましょう。

$$\begin{array}{r} 7.56 \div 6.3 = 1.2 \\ \times 10 \quad \times 10 \\ \hline 75.6 \div 63 = 12 \end{array}$$

わり算は、とをでわってかけると、はかわらない。

小数のかけ算のしくみを問うような問題。

小数のわり算のしくみを問うような問題等を出題した。

いろいろな問題にチャレンジさせる。

国語では、これまで読解問題や文字及び言葉の特徴やきまりに関する問題が中心だったが、「字数、テーマ（お楽しみ会の内容や学級レクの内容等）、書き方を指定する作文の問題」にもチャレンジさせた。作文のテーマや字数等を変えながら何度も取り組ませた。

(3) ち/を/書いた数

(4) ち/を/書いた数

5 口にあてはまる数を書きましょう。

$$\begin{array}{r} 11003 = 100 \times \square + 10 \times \square + 1 \times \square \\ 210.87 = 1 \times \square + 0.1 \times \square + 0.01 \times \square \end{array}$$

(3) 1 口

(4) $23.4 \times 1.7 = 234 \times 17 \div \square$

(5) $2.14 \times 3.8 = 214 \times 38 \div \square$

9 くら/しく/計算/しましょう。

(1) $5.3 \times 4 \times 25 = \square$

(2) $5.3 \times 2.3 + 4.7 \times 2.3 = \square$

(2) 県学調・全国学調の過去問題にチャレンジ

- ・朝活動の時間やサポートタイムの時間を利用して課題の見られた過去問題にチャレンジする。
- 様々な出題の仕方やレベルの高い問題への対応力、限られた時間の中で複数の問題を解くスピード等がつく。

(3) 補充指導・個別指導

- ・委員会、クラブのない月曜日の6校時をサポートタイム（補充指導・個別指導の時間）として活用。また、スクールバスまでの待ち時間、行事等で特別時程を組んだ日の昼休み後の時間を「すきま学習の時間（ミニサポートタイム）」として活用。
- ・個別の支援が必要な児童への通級による指導や別室での指導、4～6年生の算数授業ではT2によるサポートを行った。

4 家庭学習と家庭読書の習慣化

(1) 家庭学習の取組方を学ぶ

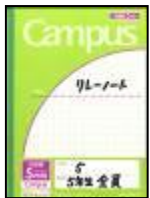
- ・「室根東小 家庭学習の手引き」（低・中・高）をもとに、各学年にあった取組方（「どんな内容で、どのくらいの量を」「開始時刻」「勉強・読書の目標時間」「勉強中の約束事」など）について学び、実際にその時間の中でやってみる。（学活1）
- ・4月の学級懇談会で「家庭学習の手引き」と「家庭学習の取組方」について説明し、保護者の協力を得る。
- ・モデルとなる「一人勉強ノート」を教室に掲示したり、学級通信に載せたりする。

〈5年生の実践〉 家庭学習は国語・算数・社会・理科の4教科、予習・復習にも取り組ませている。

家庭学習リレーノート（個人毎の「一人勉強」とは別にしているノート）…名簿順に1日ずつリレーノートに自主学習をし、担任だけでなく担任外の先生にもコメントを記入してもらう。リレーすることで友だちの取組方を親子で学ぶことができる。

〈リレーノート表紙〉 ※リレーノートの使い方

Hさんのノート (リレー) Nさんのノート

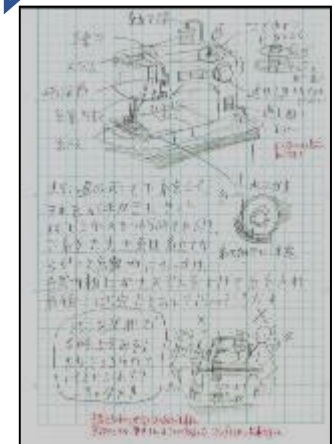
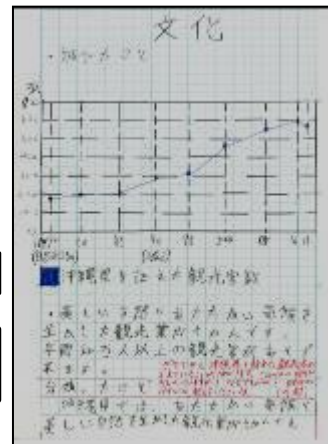


- 出席番号順にリレーノートに一人勉強をやります。（一人何ページやってきましたか）
- 一人勉強以外の余計なことは決して書きません。（人が書いたページには他の人は何も書いてはいけません）
- 学習した日にち（時間もあればもっといいです）を忘れずに書きましょう。

☆校長先生から頂いたコメント

イラストを入れながらうまくまとめていますね。あと最後にまとめとして、自分の感想も書くともっといい学習になると思います。

とてもいいにしっかり書いていますね。テスト勉強のときは書けた漢字は1回書くだけにして、書けなかった漢字の練習だけをすると時間を有効に活用できますね。できれば、口は定規を使って書くと、さらにノートがきれいになりますね。



(2) 家庭学習強化週間の取組

- ・学年毎に記録カードを作成し、学期に1回実施する。（土・日・祝日を除き平日のみの記録）
- ・家庭学習と読書の目標時間を設定し、取組についての説明も含め、学級通信で家庭の協力をお願いする。

【必須点検項目】 ①学習をした時間 □時□分～□時□分 □分間 ②読書をした時間 □分間

- ③テレビを消して取り組んだか ④集中して取り組んだか ⑤丁寧に書いたか

- ・実施後、教務主任が全校児童のカードを回収し、時間・評価について学年毎に集計をする。その結果及び課題について資料を作成し、全職員に知らせる。各担任は各学級の結果と課題を学級通信等で家庭に知らせ、引き続き協力をお願いするとともに、日々の指導に取り組む。

【成果】

◇ 4月から行ってきた学力向上対策の成果については、12月実施のCRTと平成27年4月実施の全国学調の結果も含めてまとめたい。ここでは、平成26年度岩手県学習定着度状況調査の結果から「成果」についてまとめる。

1 平成26年度岩手県学習定着度状況調査の結果より

(1) 県平均正答率との比較

	H26 県平均との比較 ()内は同一児童4年時	県平均を下回った問題数 ()内は同一児童4年時	活用(活用問題)	経年比較(経年比較問題)
			活用問題県平均との比較 ()内はH25 5年生	経年比較問題県平均との比較
国語	+11.0 (+9.0)	4/30問 (5/30問)	活用4問 -4.4 (4問 -4.3)	経年比較 6問 +12.2
算数	+19.0 (+8.9)	0/30問 (2/30問)	活用4問 +18.3 (3問 +3.9)	経年比較 12問 +20.7
社会	+7.3	5/30問	活用4問 +4.9	
理科	+8.2	6/30問	活用5問 +9.8 (3問 +2.0)	経年比較 9問 +12.5

- ・各教科とも県平均を上回っており、4年時との比較でも上向きになっていることが分かる。無解答は国語で1問1名、社会で3問各1名ずつあったが、それ以外は0であり、ほとんどの児童が時間内に問題を解いている。しかし、県平均を下回った問題と国語の活用問題への対策が必要である。

(2) 今年度掲げた目標の検証

①各教科における正答率が50%以下の児童の減少(正答率30%未満は0に)

- ・国語・算数・社会→正答率が50%以下の児童0、理科→正答率が50%以下の児童5% (4教科:正答率45%未満は0)
- ・国語と算数のヒストグラムを見ると、4年生の時に左側の層にいた児童たちが中央値付近に移動している。特に算数では、右側に高い山ができており、昨年度よりも全体的に正答率が上昇していることが分かる。

②各教科における小問正答率が50%以下の問題を10%以下にする。(H25は4・5年全教科合わせて152問中17問 11.2%)

- ・今年度は4教科合わせて120問中10問 8.3%であり、目標は達成できた。

③小5算数における「図形領域」の正答率及び小5理科の正答率を5ポイント以上上昇させる。

- ・「図形領域」の正答率は+10.2ポイント、理科の正答率は+7.9ポイント上昇した。

④児童生徒質問紙「授業の内容がよく分かる」の肯定的評価の割合を各教科とも85%以上を目指す。

- ・国語90%(◎52%+○38%)、算数…95%(◎71%+○24%)、社会…95%(◎62%+○33%)、理科95%(◎81%+○14%)
- 4教科全て90%以上である。学級の半数以上の児童が「よく分かる」を選択しており、県平均よりも高い。個への配慮がなされた学級経営や学習指導が良好に行われている結果ではないだろうか。(◎よく分かる・○どちらかといえばよく分かる)

⑤児童生徒質問紙「学校の授業以外の学習時間」については「ほとんどしない」と「30分未満」の割合を10%以下に、「学校の授業以外の読書時間」については「ほとんどしない」と「10分未満」の割合を20%以下にする。

- ・「学校の授業以外の学習時間」については、「ほとんどしない」と「30分未満」の割合が0%、「1時間以上3時間未満」の割合が81%で県平均(55%)を大きく上回っている。開始時刻も「午後6時前か午後7時に始める」割合が91%、内容も「宿題だけをする」割合は4%で、ほとんどの児童が予習や復習にも取り組んでおり、県平均を大きく上回っている。家庭学習が習慣化され、その内容も向上していることが分かる。

※1日にテレビ・ビデオ・DVDを見る時間も「2時間以上3時間未満」と「3時間以上」の割合は19%(県42%)

- ・「学校の授業以外の読書時間」については、「10分未満」の割合が24%(県37%)で、目標の20%以下には届かなかった。「30分以上1時間未満」と「1時間以上」を合わせた割合は43%(県26%)と県平均を上回っている。家庭読書の習慣化については「10分未満」の割合を減らすことが今後の課題となったが、学校では、「朝読書」や「昼読書」、「すきま読書」の時間を利用して、ほぼ全員が読書に取り組んでいる。

2 まとめ

- ・学力向上のための課題と対策の共通理解、学習訓練の徹底(例えば統一された授業スタイルやノート指導、学習のきまり等)、課題克服のための授業改善、練習問題の年間を通じた取組、補充指導・個別指導の時間の確保、全校で統一された家庭学習の取組と家庭の協力、学びの環境づくり、そして、当たり前のことを当たり前にできるように指導を徹底すること、できないこと、わからないことをそのままにしておかないこと、最後までやり抜く体験をさせることが学力向上には大切である。何事も最後まで粘り強くやり抜く気力、体力が指導者にも児童にも必要である。